

外科系医師のための臨床研究 手術を評価するアウトカム

本多通孝 著

＜書評者＞ 篠原 尚（兵庫医大主任教授・上部消化管外科）

院内で抄読会を行っている消化器外科医なら、Michitaka Honda の名前を一度は目にしたことがあるだろう。ステージ I 胃癌の腹腔鏡手術と開腹手術のアウトカムを観察研究と比較し『Annals of Surgery』に掲載された有名な LOC-1 study をはじめ、数々の一流誌に質の高い臨床研究を報告している気鋭の消化器外科医である。今回、『「…先生、手術は成功ですか？」こんな質問にどう答えますか!？」という帯の文句に思わずひかれて、本書を手にとった。外科医がこれまで何となく曖昧にしてきた「手術のアウトカム」をどう評価すべきかを論じた、本多通孝先生渾身の著作である。

数ページも繰らないうちに、私は読むのを止めた。本書は前作、『外科系医師のための手術に役立つ臨床研究』（医学書院、2017）の続編になるが、前作を読まずして本書を読み始めることがすごく

もったいなく感じたからである。世上、臨床研究について書かれた本や医学統計の入門書は多いが、前作では外科医がとつきやすい Clinical Question を例に挙げ、それを洗練された Research Question に変え、臨床研究の定石である PECO を組み立てながら研究のデザインを磨き上げていく過程がわかりやすく述べられている。ありがちな探索的研究の著者曰く“ダサイ”抄録が、仮説検証型研究のポイントを絞った科学論文にみるみる変貌していく過程は圧巻である。ただし PECO のうち P, E, C は何とか設計できても、いつも行き詰まってしまうのが O, すなわちアウトカムであり、それをどうやって測定するのが本書のテーマである。アウトカムは患者目線に立たなければ意味がないが、主観的要素が大きいため、それをデータ化するのは実は大変難しい。良い尺度が見つからなければ

ば自分で作らなければならない。こうしたアウトカムそのものを深めていく作業は、実は手術を受ける患者さんの生の声を形にする、外科医としての本質的な研究となる。本書を読み終えると、それが著者の一貫したメッセージとして伝わってくる。

もっと若いころに本書を読んでいたら自分も少しはましな論文が書けただろうに、とじくじたる思いになった私は、大学院生に前作と合わせて本書を貸した。すると案の定、すぐに手元に戻ってきた。自分で買ったのでお返しします、今書いている論文を書き直してみます、とのこと。ほらね、外科医が臨床研究を始める前にはぜひご一読いただきたい名著である。

● A5 頁 276 2019 年 7 月
定価：本体 3,500 円＋税
[ISBN978-4-260-03932-1]
医学書院刊